

特 集

特集「感染症の最近の動向」に寄せて

獨協医科大学越谷病院 内科 (内分泌代謝・血液・神経)

犬飼 敏彦

今年度の特集のメインテーマは何にしようかとはたと考えた。1 昨年は「ターミナルケア」、昨年は「生活習慣病」が取り上げられ、その他のテーマとして、「感染症」および「癌」が獨協医学会運営委員会でも有力候補に挙げられた。結局、同委員会の討議の結果、マスコミ等でも盛んに話題にされている「感染症」を取り上げることとなり、そのメインテーマは「感染症の最近の動向」ということになった。

昨今の「感染症」に関するマスコミ記事は話題に事欠かない。即ち、テロで問題になった「炭疽菌」、程度の差こそあれ医療機関に蔓延している「院内感染」、昨年、中国本土を中心に蔓延した「SARS 感染」、企業責任にも及んだ「鳥インフルエンザの流行」、未だに患者数の減少の認められない「HIV 感染」「結核感染」、肝癌発症比率の高い「C 型肝炎ウイルス感染」、更には各種抗菌薬化学療法によって生じた問題の耐性菌「MRSA」, 「ペニシリン耐性肺炎球菌 (PRSA)」, 「バンコマイシン耐性腸球菌 (VRE)」, 「多剤耐性緑膿菌」「多剤耐性結核菌」等、インターネットを通じてもかなりの量の「感染症」に関する報道が連日の如くなされている。

さて、特集を組むにあたり、上記の話題性に富んだ項目毎にエキスパートの先生に解説をお願いするのも一案であったが、それらはインターネット情報、各解説書等に一步譲ることにして、今回は越谷病院の各専門領域の方々に専門性を活かした内容で執筆をお願いすることにした。勿論、上記の日常生活において話題性のある項目も大いに盛り込んで頂くよう、留意してもらった。その領域の内訳は、診療科 7 部門、その他病理部、薬剤部、看護部を含め計 10 部門である。以下、各部門の執筆者の簡単な紹介をさせて戴く。

内科 (内分泌代謝・血液・神経) の森田公夫先生には、hematologist の立場より「血液疾患と感染症」と題して、「Compromised Host と日和見感染」「Febrile neutropenia」等を取り上げて頂いた。

呼吸器内科の濱島吉男先生には、「呼吸器感染症」をテーマをお願いした。日頃問題とされる「市中肺炎」「院内肺炎」の解説及び「レジオネラ肺炎」「カリニ肺炎」の自験例を盛り込んで頂いた。

消火器内科の鈴木孝知先生には話題性に富んだ「ウイルス性肝炎」をお願いした。肝癌との関連性の深い「C 型肝炎ウイルス」の本態等を文中で十分に語って頂いた。

外科 (消火器・一般) の中村哲郎先生にはその専門性を活かして「術後感染症」をテーマに SSI の概念を中心に執筆して頂いた。抗菌剤の使い方を含め SSI の対応策を熱く語って頂いた。

眼科の松本行弘先生には「眼科感染症」をテーマとして頂いた。眼瞼、眼窩、結膜、角膜、網膜等、各部位別に丁寧な解説をして頂いた。

耳鼻咽喉科の渡辺健介先生には「耳鼻咽喉科領域における感染症」をテーマをお願いした。日頃、馴染みの深い「急性中耳炎」「急性副鼻腔炎」「急性扁桃炎」の概説に加え、「鼻洗浄」の重要性を力説して頂いた。

泌尿器科の北原聡史先生には「性感染症 (STD)」と題して執筆をお願いした。「淋病」「クラミジア感染」「梅毒」「性器ヘルペス」等、世間で騒がれている疾患を取り上げて頂いた。

病理部の森吉臣先生には「病理解剖における感染症対策」をテーマにして頂いた。森先生の教室の 19 年間に亘る病理解剖実績を中心にまとめて頂き、更にエンバミング処理の重要性につき力説して頂いた。

薬剤部の松本富夫先生には「抗菌剤の使用実態調査と適正使用への取り組み」をテーマに執筆して頂いた。越谷病院の抗菌剤の薬剤使用現況とその適正使用のあり方につき、考察を交えて詳細に語って頂いた。

看護部の佐藤澄子先生には「看護部の院内感染防止活動」と題して、執筆をお願いした。看護部の長年に亘る「院内感染防止」に対する熱心な取り組みとそのきめ細かな活動内容が熱く語られ、今後の課題についても具体的に提唱して頂いた。

以上、特集「感染症の最近の動向」の序言として、簡単に述べさせて戴いたが、本特集が多くの方々に読まれ、本学の「感染症予防とその対策」に少しでもお役に立てれば、幸甚である。最後に、貴重な総説文を投稿して頂いた各執筆者の方々に紙面をお借りして心より深謝したい。

Special Article : Recent Trend of Infection

Toshihiko Inukai

Department of Internal Medicine, Koshigaya Hospital, Dokkyo University School of Medicine